

### Ⅲ．地域ワークショップ



# 「ESD × 生物多様性」 近畿地域ワークショップ in 京都

～存在するすべてのものには役割がある、  
それを活かすことが地域の力を育む～

## 【開催概要】

開催日時：2010年1月15日（金）19:00-21:00

会場：室町二条 さいりん館

主催：NPO 法人環境市民／ESD-J

協力：きんき環境館

参加者：37名

目的：多くの人々が生物多様性保全の重要性を知り、活動を広げていくために必要なことは何か。また、その活動が「持続可能な地域づくり」に発展していくためには何が必要かを探り共有する。



## 【プログラム】

コーディネーター：西村 仁志氏 環境共育事務所カラーズ 代表  
同志社大学大学院総合政策科学研究科 准教授

ゲストスピーカー：塩見 直紀氏 半農半X 研究所 代表  
コンセプトフォーエックス 代表  
「半農半Xという生き方」著者

井上 和彦氏 NPO 法人とよなか市民会議アジェンダ21 副理事長

19:00 開会挨拶

19:10 生物多様性をとりまく「ひとや社会」 現状の整理

西村 仁志氏

19:40 生物多様性と人間の使命多様性と感性（教育）

塩見 直紀氏



20:10 <トークセッション> 会場参加者も含めて

(あなたにとって)生物多様性って、なんですか？

～ 一人称で考えてみる ～

20:30 事例紹介：地域の子育て中のお母さんたちの取り組み

「冒険遊び場（プレイパーク）」づくりと生物多様性 井上 和彦氏

21:00 終了

## 【ワークショップの報告】

### <開催主旨>

これまで、生物多様性保全に関連するものとして、植林活動や自然再生、河川の保全活動、ごみの不法投棄に対する取り組みなど、その地域に関わる重要とされる問題や関心の高いテーマで、多くの自然保護活動が行われてきました。ただ、これらの取り組みや活動の多くは、生物多様性保全が明確な目的になっているのではなく、特定の地域の荒廃を防ぐことや希少生物についての保護を目的にしていることが多く、その保全や生育環境を考え整備した結果、生物多様性保全にもつながっていたということが多かったと考えられます。

また、これらの取り組みが保全活動だけに終わるのではなく、地域の生物多様性を大切にしたい人々の暮らしが、「持続可能な地域づくり」につながっていくためには何が必要なのか、ESDの視点から考えることを目的として開催しました。

### <生物多様性を大切にしたい地域づくりの課題>

#### ■国家戦略と地域間のギャップ

第3次生物多様性国家戦略では、『人と自然が共生する「いきものにぎわいの国づくり」』をめざし、同時に国や地方公共団体、企業、NGO、国民の役割の項目が示されています。しかし、その具体的手法に関しては各主体に任せられる形となっており明確には記されてはいません。そのような状況のなか、それぞれの地域の特性を十分に考えた上での取り組みが必要とされるため、第3次生物多様性国家戦略に基づいて、地域で生物多様性保全をどう進めていくのか議論をはじめた自治体もあります。

しかし、まだ多くの自治体では、地域での活動の中にすでにある自然保護活動を軸として考えていることはわかるものの、しっかりとした生物多様性の視点から、それらの取り組みを結び、体系立てて生物多様性保全を目的とした施策に展開しているところまでには至っていません。手探りの状況と言ってもいいでしょう。

#### ■生命圏で考える

西村氏は「自治体に境界線はあっても生き物に境界線はない。渡り鳥は国をまたぐし、川は都道府県をまたいでいる。大陸からわたってくるツル類をわたってくる場所で一生懸命守ったとして、渡ってくる前の場所でどのような状況にあるのかはわからない。生物多様性保全は生命圏で考えることが必要。」と述べ、国家戦略のなかに生命圏で考える際に必要な、国レベル、都道府県レベル、基礎自治体レベルでの

連携をどのように体系立てていくのか考える必要性が示唆されました。

### ■「科学的合理主義」と「生活環境主義」

また、「生き物は地球公共財である」との考え方ができる。普段はピンと来ないかもしれないが、実は地球にとっての大きな公共の財産である。レッドデータブックなどがそれを表している。しかし、一方で「地域の暮らし」を考えると、うまくかみ合っていないこともわかる。例えば、農業や漁業など自然を生業にしている人もいるし、生活圏の中でも害虫がいると嫌な人もいる。また、クマやイノシシ、シカなどによる野生生物の獣害という問題もある。地球公共財と人間の暮らしの論理がうまくかみ合っていない。そこで、科学知と市民の知が手を結ぶことが重要」と述べられ、「科学的合理主義」と「生活環境主義」とのせめぎ合い、確執があることに触れられています。

他にも資源の枯渇問題など、地球規模的問題と地域のくらしの問題とでもギャップが生まれているのです。

### ＜既存の活動を、教育(ESD)の側面から見たとき、これまでにどういった効果があり、どういったことが課題となっているのか＞

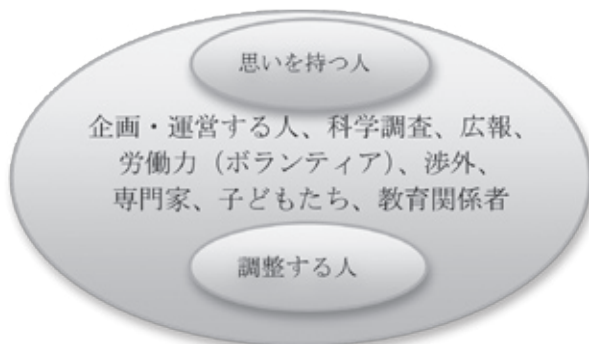
### ■地域における生物多様性保全でのパートナーシップの重要性

生物多様性保全を巡っては多様な利害関係者がいます。例えば、特定の地域の保全をしようとしたとき、直接の土地の所有者だけでなくそこを使う人、周辺に住む人、その場所に影響を与える事業をしている人、保全することで影響を受ける人、行政など、関連する関係者を想定すると、何層にも渡る関係者の存在があることがわかります。もし、希少生物の保護などになるとさらに国レベルでも関係してきます。

一方で必要としたことが、実は他方で生きものの成育状況の悪化を招く事態に発展することもあります。その事例として、ある地域での稀少淡水魚の保全活動が紹介されました。

立場が違くと視点も違うことを端的に表した事例でしたが、ここで明らかになったのは、あるひとつの主体、例えば自然保護団体だけが頑張るだけでは保全は難しいということです。具体的にいうと、保全活動をすると同時により多くの人に稀少淡水魚の存在とその価値を知らせ、関係すると思われる人たちで共通認識を持つことが必要でした。次のような事柄が浮かび上がります。

協力する関係者が増えるほど効果は大きくなる



また、直接利害関係者同士での話し合いや関係構築は非常にデリケートであり、難しいため、このような多様な人たちを結びつけていくためには、コーディネーターの存在が重要であると考えられます。

## ■ 天竺のはらっぱであそぼう!

服部緑地の一部である、通称「天竺のはらっぱ」が舞台となっている取り組みでは、暮らしの身近なところとつながる生物多様性と、生物多様性に気づき学ぶプロセスがESDにつながっている事例紹介が井上氏からありました。



## 【事例】

服部緑地の一部にごみの不法投棄などの問題があり、フェンスで囲まれ自由に出入りできない空間が存在していました。そんな場所が、子どもたちを自然の中で遊ばせたいという母親らによって、地域の交流の場に生まれ変わります。

このフェンスで囲まれた空間は、自動車の心配をすることも無く子どもたちを安全に遊ばせることができます。しかも、それまで頻繁には人が立ち入っていなかったため、草はらが広がっていました。そこで、この場所を月2回使えるようにと行政に提案し、子どもたちの遊び場としました。その結果、いろいろな世代の子どもたちが集まり、様々な遊びや交流が始まりました。また、近くの学校から椅子などを貰い受け居心地のよい空間が集まった人たちによって作り上げられていきました。自然に詳しい地域の人たちが来ては、子どもたちに様々なことを教えてくれます。地域との連携も自然とできあがっていきました。

一方、活動をはじめた母親らも、公共の空間である公園を自分たちだけでなく、もっと多くの人に使ってもらえるスペースにしなければならないという課題も持ち上がりました。そこで、公園を知ってもらうための広報活動にチラシをつくり、行政と交渉するなど活動が広がります。活動資金調達のために助成金を申請。その申請すらどうすればいいのかわからず一からの学習です。

その間にも公園には変化が生まれます。伸びてきた草を業者に刈ってもらうと一様に短く刈られてしまいます。自分たちで草を刈る、草丈を調整するだけでそこに棲む虫の種類が変わってくることも学びました。都会の中で、子どもたちにとってもよい環境をもちたいと考えた時、生物多様性と結びついたのです。

「公園を子どもたちのために使いたいという単純な思いから出発した取り組みは、その過程で自分たちに必要な場所はどのような場なのかを感じ学びました。次に、そのような場をどのようにして残すのか、社会への働きかけを自らがすることで仕組みを知り、行政や市民とのコミュニケーションをはかる経験となりました。」と、井上氏は述べ、「何より「自分たちが公園を使うのは月にたったの2回だけ。でも、自然は24時間成長し続けている。植物も昆虫もみんな原っぱを使っている。自分たちはほんのわずかな時間、その場を借りているだけなんだ。」こんな考え方をするグループになったのです。」と、結びました。

天竺のはらっぱは、子どもと大人が自然に学びながら、人と人がつながる場所になりました。

## <現在の活動を、生物多様性保全に根差した地域づくり・人づくりに展開していくために必要な視点>

### ■半農半Xの観点から考える「ESDと生物多様性」のキーワード

#### ～塩見直紀氏からの9つの提起～

- 1 感性（感受性、センス・オブ・ワンダー、まなざし、こどものころ・・・）  
なんでもおもしろがってみる。感じる心。
- 2 ことば力  
新しい「ことば」をつくるのは大事。そして、紹介していく。
- 3 地域資源発掘（宝もの探し）  
地域の資源を発見する。
- 4 各人の天与の才の発揮  
新たな視点から、その人の「X」を引き出してあげるという観点。
- 5 育てて用いる  
生物多様性には守るという観点が強いが、育てて用いることも大切。これは日本の哲学ではないか。
- 6 組み合わせ力  
組み合わせ力は非常に大事。料理人が素材と出会うと新しい料理が生まれる。
- 7 あるもので、ないものを創る  
地元学　ないものねだりからあるもの探し。
- 8 情報発信  
発信できることで解決できることがたくさんある。
- 9 シェア（分かち合う時代）  
分かち合い

### ■生物多様性と人間の使命多様性と感性

「使命多様性」という言葉を塩見氏が創られたそうです。この世にあるもの全てにミッションがあり、みんなバラバラの使命を持っています。でも、実はみんなでひとつの使命も持っているのです。

国語の教科書には環境問題や星野道夫さんの文章など、感性に響くものが多く登場します。塩見氏は、「あぜ道に生える草がある、草は敵だと考えるのは考え方が貧困になっているのです。草は師匠にもなります。国語的感性をいかした感受性教育を若い世代にしていくのが大事」と話されました。

### ■ESD×生物多様性保全＝「人と自然と社会をつなぎ未来を創造する」

「生物多様性保全の活動により、個人の思いからつながる関係者の共通の共感を得ることができる。」と、西村氏は言います。同じ川に市民も研究者も一緒に入って同じ現場を同時に体験でき、そこでどれだけ水が澄んでいるのか、どのくらい冷たいのか、どんな魚がいるのか、同じ感動を得ることができます。社会への共感を広げられる可能性があるのです。

「それぞれの生物多様性保全の活動は、人と自然と社会をつなぐ活動であり、そこから未来を創造する活動になればと考えます。そのためには、まず人と人がつながることが始まりではないか」と、西村氏は結びました。

（報告：NPO 法人環境市民・下村委津子）



# 「ESD × 生物多様性」 北陸地域ワークショップ in 金沢

## 北陸における里山保全等による 生物多様性保全に関するワークショップ

### 【開催概要】

開催日時：2010年2月7日（日）13:00-17:00

会場：石川県生涯学習センター35号室

主催：環境省中部地方環境事務所  
金沢大学  
NPO法人いしかわ自然体験支援隊  
ESD-J

共催：国連大学高等研究所いしかわ・かな  
ざわオペレーティングユニット  
社団法人いしかわ環境パートナーシッ  
プ県民会議

後援：石川県  
石川ユネスコ協会

参加者：47名（発表者・パネラー含む）  
教職員、大学関係者、県職員、ユネスコ協会関係者、地域住民（里山関係者）、  
大学生、動物園関係者、国連大学関係者など

目的：北陸3県では、数多くの自然学校に代表されるように多くの体験的自然教室が行われ生物多様性保全学習に寄与している。また里山里海に関する多く研究も行われているが、里山里海の荒廃を食い止め、地域の活性化に貢献するケースは極めて限られている。本ワークショップでは、高校が率先して里山の保全活動に取り組んでいる石川県立大聖寺高校の活動、富山市の呉羽丘陵で行政、住民、学校、NGOが一体となって山再生に取り組んでいる「悠久の森事業」、能登地区に定着する農業従事者のため金沢大学が行っている「能登里山マイスター養成プログラム」を事例として、北陸地域の関係者の参画を得てこれらの事例から得られる経験・教訓を共有すると共に、個々の里山保全、生物多様性保全について討議することにより、人と自然のとの共生の在り方、そのための人材確保に向けた方策について検討する。



## 【プログラム】

事例発表者： 三津野 真澄氏（石川県立大聖寺高校 教諭）  
山本 茂行氏（富山市ファミリーパーク 園長）  
小路 晋作氏（金沢大学 地域連携推進センター）  
コーディネーター：鈴木 克徳氏（金沢大学 特任教授／ESD-J 理事）  
パネラー： あん・まくどなと氏（国連大学高等・いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長）  
山本 茂氏（富山市立寒江小学校 校長）  
鳥野 耕司氏・斉藤 礼華氏（石川県立大聖寺高校 SEP 委員）  
吉島 登氏（夕日寺町 元町会町）  
佐野 郁雄氏（NPO 法人いしかわ自然体験支援隊 副理事長）

13:30 開会（ご挨拶、開催趣旨、日程説明）  
13:45 実施報告（各報告20分 質疑10分）  
聖高エコプロジェクト（三津野）  
地域社会と学校と、動物園をつなぐ「くれは悠久の森」事業（山本）  
「能登里山マイスター」養成プログラム：里山資源を活かす地域再生リーダーの育成（小路）  
15:15 休憩  
15:30 パネルディスカッション  
北陸の里山及び生物多様性保全に関する展望、海外との連携  
上記パネリストによる10分程度ずつの意見陳述  
16:20 全体会（会場を含めた討議）  
まとめ・評価  
17:00 閉会

## 【ワークショップの報告】

### <各報告の概要>

#### ・聖高エコプロジェクト（SEP）

2002年に開始し全校挙げての環境保全活動で、①校内における無駄の見直し、環境負荷の軽減の取組等 ②学校近隣の荒廃した山林への笹刈・間除伐等のボランティア活動を実施。

#### ・地域社会と学校と、動物園をつなぐ「くれは悠久の森」事業

富山市の中央部に位置する呉羽山丘陵において「富山市ファミリーパーク」が中心に、平成19年から行っている「くれは悠久の森」事業の紹介と、今後、関係機関が協働するための問題点と課題を整理。

#### ・「能登里山マイスター」養成プログラム：里山資源を活かす地域再生リーダーの育成

高齢化が進み過疎化した能登の再生を目的に、能登の里山や里海のポテンシャルを最大限に活用し、平成19年より金沢大学が中心に産・官・学・地域が協働して地域再生のためのリーダーを養成す



るための事業。

## ＜パネルディスカッションの主な論点＞

- ・県内の加賀市の大聖寺高校をはじめ金沢桜丘高校、翠星高校や、国立石川高専などが山林ボランティアを行っている。他校でも同様の活動を行えないか。
- ・富山市ファミリーパークでは日本のモデル事業になり得るであろうマルチステークホルダーによる「悠久の森」事業が実施されているが、その課題は何か。
- ・金沢大学が能登で実施している「里山マイスター養成」事業の継続の可能性はどうか。この制度は能登以外に展開できないか。

## ＜特筆すべき事項＞

今回のワークショップの目的の1つである若い人の参加という点で、パネラーとして参加した大聖寺高校の2人の生徒は、森林ボランティア活動は自分達にとって環境問題を考える上で非常に良い経験だったと話し、会場の金沢大学の2名の学生も、中高生時代に様々な自然体験活動をする機会は非常に大切だ、自分達も過去に色々な自然体験をしたかったという意見が出された。また、双方共通の意見として、もっと多くの高校や大学で「里山保全」等の活動が展開出来るようになって欲しいとの希望が述べられた。

## ＜ワークショップの成果＞

### a. 参加状況及び分析

連日にわたり金沢で同様なイベントが行われた関係もあったのか、一般参加者数は31名で募集定員60名に対しての充足率は50%。当初の参加目標数30人から見れば100%の充足率である。参加者の充足率から見る上では今回のワークショップは成功したと言える。以下参加者の所属を解析すると、高大学生が各2名に留まり、若い人の参加が少なかったことについては反省すべき点である。県に後援依頼したこともあり県関係者が11名で、環境部長はじめ、環境部の関係部署からの参加があり今ワークショップに対する県の期待の大きさが推察される。次に今回のワークショップ開催事務を担当したこともあり私ども「NPO法人いしかわ自然体験支援隊」会員が8名であった。このことは、私どもの会の中核を担うメンバーが「ESD」や「里山保全×生物多様性」を理解するに非常に良い機会となった。

### b. 社会づくり、人づくりに対するヒント

ワークショップの討議から、以下のような指摘ができると思われる。ただし、以下の事項は、森江の私見に基づくものであり、ワークショップでの合意・結論ではないことに留意されたい。

既に様々な所で生物多様性×里山保全に関する活動は多く行われており、多種多様な活動は多様



な関係性を深める上で大変良いことである。しかしそこには様々な問題や課題があることが浮き彫りにされてきた。それを整理してみると概ね以下の様になる。

- ・活動の目的が不明確である
- ・協働する範囲が狭い
- ・継続するための資金的課題 等

そこで今回の北陸ワークショップでは、これらの問題や課題を整理し、生物多様性×里山保全活動を行う上で必要、且つ明確にすべき点を洗い出し、3事例を参考に課題解決の方法を検討した。

個々の活動において（地域住民・産・官・学・NPO等）ステークホルダーの良好な関係の構築と各々が持っているポテンシャルを最大限に活かせる仕組みの形成が必要であり、その仕組みの運営が適切に行わなければならない。仕組み作りに必要なのは、関係者が活動の目的とガバナンス、役割分担を明確にし、それを共有することである。そのために地域のコーディネーターの果たす役割は大きい。

具体的にすることとして参加者（経験者）を増やすという点から見れば、反対意見もあるが、強制的にボランティア（高校・大学・町会等の地域や既成の団体、その他）に参加させる形態をとることも必要である。やはり強制的にしろ、活動に参加し体験しそこで判断する機会を設けることが大切である。

活動を行うに当たり、その人たちに対する対応や処置が大切なファクターになる。それらは以下の様なモノと考えられる。

- ・参加者のモチベーションを高めること（楽しい・自然に対する理解が出来る・達成感・充実感・満足感・健全な人間関係の構築など）
- ・活動結果の効果測定（アンケートや反応・ふりかえりなど、適切な評価）を行い、次回以降の活動に反映すること
- ・参加者を増加させる工夫

参加者を増加させる要因で一番多いと思われるのは口コミである。高校ではクラスや部活、友達への積極的な呼びかけや保護者の理解と協力、大学でも高校同様クラス、部活単位、ゼミ生への呼びかけも期待できることである。地域や職場でも同様に活動の効果を宣伝してもらうことが大切である。そのためにも先に述べたモチベーションの確保は大切な作業である。特に高校・大学生の大半が小学校時代を最後に、自然体験をしなくなっており、心のゆとりや、深みを学ぶ機会が減少したとの意見もあった。

北陸でも、特に石川県に代表される「いしかわ自然学校」など自然体験活動や里山保全活動の実施は増加傾向にあるが、前述した、高校生、大学生が参加対象のプログラムが極めて少ないと言わざるを得ない。逆に言えば高校生、大学生に対し魅力ある活動を提供していないともいえる。繰り返しになるが、きちんとしたプログラムで、学校単位やゼミ単位で高校生、大学生が体験できる自然体験活動の場が必要である。そのためには持続可能な組織と適切な指導者が必要であり地域の協働が大切になってくる。最後に、学校教育制度の見直しの視点からも、幼稚園・保育所から大学まで環境教育に対する、一貫したカリキュラムを検討する時期に来ていると思う。

（報告：NPO 法人いしかわ自然体験支援隊・森江章）

# 「ESD×生物多様性」 北海道地域ワークショップ in 紋別

持続可能な紋別に向けて  
～アイヌ民族の権利回復が今の社会に示すもの～

## 【開催概要】

開催日時：2010年

2月26日（金）18:30～21:00

27日（土）9:30～15:30

会場：紋別市オホーツク交流センター・多目的ホール

主催：さっぽろ自由学校「遊」／ESD-J

参加者：36名（地元以外からの参加者7名、  
地元参加者23名）



目的：このワークショップでは、畠山さんのアイヌ民族としての思いや、持続可能な紋別に向ける既に取り組まれている活動を地域の人びとと共有すると共に、先住民族の視点を地域づくりに取り入れていくことが、地域の自然の保全と人の生業との両立やアイヌの尊厳や権利の回復にどう結びつくのか、そして尊厳や権利の回復が、現代の社会の中で一体どのような意味を持つのかを共に考え、今後の活動の方向性を、一緒に探っていくことを目的とする。

## 【プログラム】

講師：畠山 敏氏（北海道アイヌ協会紋別支部長）

鷲頭 幹夫氏（農業、文筆業）

上村 英明氏（市民外交センター代表、恵泉女学園大学教授）

スタッフ 進行：小泉 雅弘（NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」）

記録：野口 扶弥子（ESD-J）、有坂 美紀（EPO 北海道）



## 26日（金） 第一部 紋別における地域課題と先住民族の権利

18:30～18:50 オリエンテーション～ワークショップのねらいについて

18:50～20:00 「これまでの活動の背景と経過について」 畠山敏・鷺頭幹夫

20:00～20:30 「先住民族の権利に関する動向と地域課題」 上村英明

20:30～21:30 意見交換

## 27日（土） 第二部 課題の共有と活動のプロセスデザイン

9:30～12:00 情報共有と課題の整理

13:00～15:30 今後の行動プロセスと関わり方

### 【ワークショップの概要・参加者の反応】

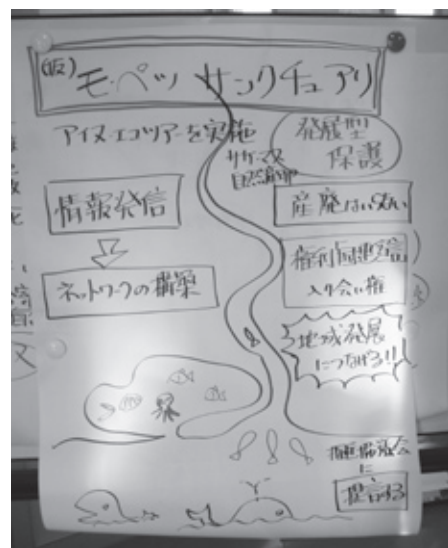
#### <1日目>

初日は、まず畠山・鷺頭両氏よりこれまでの道や政府に対する提言活動の背景にある思いや活動の経過などを語っていただき、それに重ねて上村氏よりこれらの提言内容が国連の先住民族の権利宣言や生物多様性条約の条項にどう対応するのかなどを解説していただいた。参加者との間では、当初から活発な意見のやりとりがみられた。とりわけ、地元で漁師を営むアイヌ民族の方から以下のような生活に即した率直な思いが語られ、参加者の心に響いた。

「これまでもこうしたセミナーや何々の会というものがアイヌに関してたくさんあった。しかし、それで何が変わったのか？ 実際問題として、我々は困窮している。行政に対して要求をしても、何も動かない。何かひとつでよいから突破口がほしい。…文化、文化というのが、踊ることが文化か？ 儀式だけが文化か？ それだけでは、実際に飯を喰えない人間もいる。そういうことを優先してもらいたい。」

#### <2日目>

初日の段階で想定していた以上に課題の共有がなされたこともあり、二日目には活動を広めていくための様々な意見やアイデアが出された。以下にその一部を紹介する。



- ・海と丘との関わりに着いて、畠山さんが山は海にとって大切といわれているが、山のアイヌが海に対して同じようなことを言っている。そこと合わせて発信してはどうか。
- ・伝統捕鯨、サケ・マスの管理を一括りにして考えた方がいい。
- ・アイヌの人たちは自分で見て、触って、考える。そこを見つめていきたい。人間の能力はずっと退化してきていて、いずれは自ら作った文明によって破滅するかも知れない。生命の地球の中で生きてきた先人たちの本当の誇りを共有したい。
- ・マオリのエコツアーには国からの補助が最初があったと思うが、ツアーによって鯨とアイヌの関係を見せるのはどうか。
- ・藻別川には、サケが自然産卵するなどすごく素敵な条件がある。COP10にも非常にマッチングするので、名古屋に向けて大きく取り上げてはどうか。
- ・(コムケ湖を)子供でも年寄りでも降りて行けるような湖にし、アイヌも自分たちで生活を向上していけるようにしていかなければ。
- ・権利は何度も主張していくうちに、だんだんと認められてくる。いったんは負けても繰り返し主張していくことが重要。

これらのアイデアをまとめる形で、参加者の一人から今後に向けての包括的なビジョンとして、「モベツ・サンクチュアリ構想」が提案され、地域の生態系保全とアイヌ民族の権利回復、そして地域の生業や経済的側面も視野に入れた総合的な取組みのイメージが共有された。

外部からの発案による今回のワークショップが果たして地域の人々に受け入れられ、よい成果をあげることができるのか不安な面もあったが、結果的には非常に内容の濃い、充実した話し合いが実現したように思う。地元の参加者にとっても、地元以外の参加者にとっても非常に刺激的な内容となったのではないだろうか。

## 【ワークショップの成果】

このワークショップ開催の第一の目的は、畠山氏らの取組みの意義を理解し、共有する人の輪を広げることであった。そのためには、地元の参加者が集まってくれることが重要であったが、アイヌ民族や漁師の方々などの参加を得ることができ、またそうした参加者が生活に根ざした率直な意見を積極的に出してくれたことは大きな成果であった。また、地元以外からもアイヌ民族の有志や環境関連のNGO関係者など多様なメンバーが集まったことで話し合いの幅も広がった。この第一の目的は、十分に達成されたといっていよいと思う。

ワークショップのもうひとつの目的は、課題の共有を前提とした上で、今後の紋別における取組みのビジョンを見出し、地域へ働きかけるためのステップとすることであったが、これについては畠山氏が訴えている課題（アイヌ民族生存捕鯨の復活／サケ・マスの資源管理権／深海底未利用資源の利活用／森林・河川の開発計画への参画）を一体のものとして捉え、アイヌ民族の権利回復を地域の生態系や生物多様性の保全という文脈に位置づける「モベツ・サンクチュアリ構想」というビジョンが提案され、共有されたことで、今後の地域や周囲に向けての働きかけの大きなヒントが得られたように思う。

今後は、今回のワークショップの成果をいかに次のステップにつなげていくことができるかが大きな課題となってくる。そのためには、中・長期的な視点に立って人々に働きかけ、活動を展開していく仕掛け人（オーガナイザー）の存在が重要だと感じている。

## 【ワークショップから導き出された社会づくり・人づくりへの視点】

この紋別における地域事例の特徴は、先住民族であるアイヌの権利回復という北海道地域における根深い歴史的課題と、地域の生態系や生物多様性の保全という環境課題を別の事柄ではなく一体のものとして扱っている点にある。ワークショップでは、それに加えて地域において漁業などの一次産業従事者の生きる手立てが奪われつつある現状が浮き彫りになった。ESDにおいては、現在の経済・社会構造の中で周辺に追いやられている人々の声に耳を傾け、彼／彼女らのエンパワメントを促すと共に、その意見を真に反映させた縦割りではない地域の新たな総合的ビジョンを打ち出していくことが求められていると感じた。

また、今回のワークショップにおいて、改めて地域において一人一人の生の声を出し合えるような平場の話し合いの場をもつことの意義を感じることができた。そこにおいては、環境や人権に関わるNGOや市民・住民の立場に立った研究者の存在も重要となってくる。これらがうまくつながりあい、呼応しあえるような関係性ができれば、本来の意味での民衆主体の社会づくりを生み出していくことにつながるのではないだろうか。

（報告：NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」・小泉雅弘）